

# 道づれ雑記

倉橋重史

「いろはかるた」に「たびは道づれ 世はなさけ」というのがある。好きな句である。なぜなら此の句はまさに社会学の本質をいいあてているからである。恩師故蔵内数太先生も此の言葉から演繹すれば社会学がでてくると書いておられる。じつは蔵内先生のこの言葉は元仏教大学の社会学部教授であった、故潮見実先生が「鷹陵」にのせられた随筆にたいして書かれたものである。私も亡くなられた両先生からこの話を直接に聞いたことがあり、今思い出すと実に懐かしい。蔵内先生はこの句の下に、雨天に登校途中の三人の子供のうち、一人がしゃがんで連れの子の足駄の鼻緒の切れたのをすげてやっている画があり、「僕は小学校の一年生から社会学を教えられていたのだ」といわれていた。(蔵内数太著作集 第4巻 187-191頁)これから「道づれ雑記」という題で書きたいのは、去年(1990年)9月に4人の先生方と北京、北朝鮮を旅した時のことについてである。それを先生方のご了解を得たうえで発表した。

9月1日 晴れ

朝5時起床。荷物の点検。6時45分タクシーが来る。土曜日だからクルマは初めよく流れる。だが徐々に停滞しはじめる。後で事故のためとわかる。7時半空港に到着。近藤先生が先きに着かれており、二人で待つ。小谷先生がやがて来られる。高屋、樋口先生は停滞のため大幅におくれられるが、やっと旅の道づれ五人のメンバーが揃う。入場しようとしたとき、写真が無いのに気がつく。北朝鮮への入国ビザのため必要な写真である。旅行者の人に話してもラチがあかない。仕方なくそのまま行くことにした。10時40分、定刻に take-off。台風16号の影響のため多少遅れるのではと心配したが、無事

1時45分に北京に着く。

北京の気温は30度近い。涼しさを期待していたのにがっかりする。しかし中国仏教協会の徐明さんと董平さんのお出迎えをいただき、暑さも忘れるほど嬉しい。徐明さんとは3年ぶりの再会。開口一番3年前の出来事の話になる。宿舎是北京飯店。車は懐かしい並木道を走る。樹々の梢から洩れる光が車のフロントガラスに眩しく反射する。まだ夏は終わっていない。道路のあちこちに赤や緑の旗が見える。第11会アジア大会のためのもので、よく見ると緑のは萬里の長城をデザインしたもの、もう一つはパンダをデザインしたものであった。市内に入ると先ず第一に建物の建築ラッシュに驚く。第二に人々の服装が以前より美しくカラフルになっている。第三は街全体が美しい。あの天安門事件の影は無い。あるいはそれを拭うための努力の結果か。ホテルで荷をとき、すぐに写真を撮りに王府井へいく。一軒の店は現像まで一週間かかるという。どうやら記念写真専門の店らしい。この国ではそのような店が多いのであろう。写真を撮り記念として残しておくということは、ある社会では日常的なことであっても、他の社会においては非日常的なことであろう。別の店に行って交渉すると可能という。二階に上がるのに三・四階ほどの階段を登るとちょっとした広場になっている。そこに撮影室があった。赤ちゃんを抱いた若い父親と娘づれの母親がいた。写真を撮る人は流石にプロで、赤ちゃんをうまくあやし、シャッター・チャンスをつかっている。こんな光景を見ていると、一般大衆の生活の楽しさ、喜び、力強さが直に伝わってくるようである。

明後日のビザ用に必要な写真が出来たので、一先ず安心して街に出る。いつものように人また人である。この人波には圧倒される。今回はとくにこれらの人々の明るさ、エネルギッシュ

な姿が印象的である。さきの写真館で出会った人達をはじめ、空港やホテルで出会った人々、そして今街を歩いている人達の屈託の無さは、とくに去年の6・4事件後のことが気に掛かる私にとっては理解するのが難しい。アジア大会前ということも確かに一つの理由になろう。だがこの国の経済は大変なところに来ているらしい。労働者の平均月収は250—300元という。わが国のそれに換算すると7,500円—9,000円である。街にあふれている人々の交通手段である自転車の平均的な値段も略それに匹敵するらしい。またアジア大会の入場券は250元という。こんなに高ければ一般大衆は開会式に入場することもできない。国民が入れない国際大会なんて意味が無いといえるのではないのか。でも民衆はどっこい生きている。この力強さ、活力の秘訣は何なのか。

それはひょっとして一種の諦め、あるいはそのような形をとった政治的反抗、あるいはその形をとった強力な抵抗、不信感のあらわれかもしれない。かの「十八史略」の冒頭にてでくる老人の「日出て作し、日入りて息ひ、井を鑿りて飲み、田を耕して食す。帝力何ぞ我に有らんや」という話は、確かに理想的な統治の姿を描いたものであるが、統治機能が低下し、統治自体がわからなくなったとき、民衆はこれと同様の判断を下すかも知れない。それは斜に構えた、あるいは堂々と正面切った、しかも強かな、統治者にたいする抗議であり、反抗といえるかもしれない。そしてこのような現象はたんなるシラケというものから徹底的な抵抗まで含んでいるといえよう。軍隊に蹂躪され、秘密警察に狙われ、隣人の密告にさらされる状態で、人間はいったいどのようにして生きることができるのか。自己を護り、生きるために、人はそこから逃避するか、忘却するか、偽装し、誤摩化し、仮装するであろう。このように考えるとニーチェがいったルサンチマンや力の意志などが解ってくるような気がする。

夕飯をとりながら、中里介山の大菩薩峠の話がでる。盲目の剣客、机龍之介の活躍等の話である。普通の会話では聞けないような話が聞けるのは楽しい。旅は道連れの長所である。8時

頃、中国仏教協会の申先生が来られ、久しぶりにお会いして嬉しい。北京のこと、中国の最近の状況、朝鮮半島の情勢などの話が出る。部屋から街を見るとさすがに人影は少なくなっている。

9月2日 晴れ

朝5時前に起床。多少緊張気味なのかもしれない。昨日の日記をかく。今日もよい天気らしい。天津行きを計画。タクシー2台に分乗。近藤先生、小谷先生と同乗。市街の並木道が美しい。樹々が作り出す自然のアーチの下を車が走る。並木の外に田園が広がり、ところどころに村が点在する。道は広いが徒歩の人、自転車に乗る人、ポニーのような子馬に荷車を牽かせる人、トラックに乗る人、オートバイ、自動車などいっぱいである。幾つかの小さい村や大きい集落の側も通る。スローガンであろうか、文字が壁に大きく書かれている。集落の近くには人が多く屯している。道路の修復にも大勢の人が働いている。

天津まではかなりの道程である。片道3時間はかかるらしい。車中お二人の先生からいろいろな話が聞けるので退屈しない。写真を撮ったり、景色を眺めているうちに、大きい街に入ってきた。11時過ぎにやっと天津に着いた。かなりの大都市である。街の建物も洒落ている。フランス風のようなのである。フランス租界があったところだと樋口先生が話されていた。エキゾチックな雰囲気をもつ建物も垣間みえる。「天津橋下陽春の水、天津橋上繁華の子」という唐詩選の詩を思い出す。そんな橋を渡って車は市内に入っていく。

ここは天津条約が締結された土地である。それはアロー号事件で清が英佛露米の四ヶ国と結ばされたもので、キリスト教の布教がこのために自由になった。そう考えれば教会風の建物が見えるような気もする。市の中央部に来ているのかひどい混雑である。日曜日と重なったためかもしれない。すごい人波である。百貨店らしいところに入る。品物は豊富であるが種類が多いかどうか解からない。この中も人が多い。ウ

インドウ・ショッピングなのかもしれない。再び街に出る。例のアジア大会の旗が何処にも飾ってある。歩道で散髪している風景に出会う。また歩道に老人が座りこみ、その前に体重計が置いてある。体重を計ってお金をとる商売らしい。こんな商いもあるのかと感心するが、ここでは体重計そのものが貴重な器械なのであろう。

車に乗ろうとしたらタイヤがパンクした。途端に物見高い市民が集まってきた。そういえば我々が天津市内に入る時、人だかりに遭遇して車のスピードが落ちたが、なぜかとよく見るとバスを人々が後ろから押していた。この光景は我々にとって珍しかった。パンクの修理が終わり南市食品街へ行く。車は人また人の雑踏をかきわけるようにして進んで行く。日本ではとても運転できないような場所である。3階まで上がる。そこで昼食をとる。美味しい。食後近くの市場を見学し、それから水上公園に向かう。船にのり対岸につく。蓮の花が少し咲いている。そのときここにパンダがいるということを聞く。俄然元気が沸いてくる。この公園にきたときは何か疲れを感じていた。それがパンダという一声で変わってしまった。現金なものである。水上公園とは何の変哲もないところではないかという見方、とらえ方がパンダの存在によってガラリと変わっていく。

この変化、心理の推移は面白い。偶然性、予期しなかったものとの出会いと、その期待、憧れが、大げさにいえば、無目的であった人間に確固たる目的を与え、自信と希望を植えつけたのである。パンダを少しでも早く見たい。そして十分に、かつゆっくり、この目で確かめたい。パンダの所在を尋ね歩く。右手には子馬に人を乗せている広場が見える。横には飛行機が展示されている。そうこうしていると「熊猫館」という表示をみつける。入口は裏の方らしい。足取りも軽く、かつ早くなり入場券を買って入る。するとすぐ目の前にはっきりした白と黒の色の元気なパンダが座って、一心不乱に笹をたべている。円形の建物の向こう側にももう一頭のパンダが同じような格好をして食事中である。可愛い。妙な表現であるかもしれないが

文句無しに可愛い。どこが可愛いかといっても表現のしようがない。顔、体、しぐさ、すべてとしかいいようがない。動物の嫌いな人もいよう。だがこの動物が嫌いな人は少ないであろう。いてもその数は少ないであろう。それはこの動物の珍しさ、愛嬌、人に危害を与えると考えられないことなど複数の原因によるのではないであろうか。四川省辺りの山中に生息しているという。だからそれ以外の地域の人間は見ることには出来ない。この希少性がパンダの人気を高くさせている大きい原因の一つであろう。またこのパンダという言葉も珍しい。発音自体も軽くはずみがあり、面白い。ネパール語らしい。この動物にはこの名前ほど相応しいものは無いのではなかろうか。中国語の熊猫という表現はなんとなく熊と猫についての先入観がつきまとう。やっぱりパンダが一番ぴたりしており相応しい。名は体をあらわすと云い得るかもしれない。こんなことを考えている私には目もくれずパンダは一心に笹を食べている。その仕草がじつに可愛い。無心であることは素晴らしいことである。先生方は記念にとパンダをバックに写真におさまる。パンダは大人を子供のようになつて無邪気にさせ、心を和ませてくれる。

元きた船着場へ戻ろうとする。道を一寸見失うが、なんとかたどり着く。だが船はもと来た場所には行かないらしい。仕方なくモーターボートに乗って帰ることにする。モーターボートに乗るのは本当に久しぶりである。風が涼しい。操縦している若者は遠回りをしきりにすすめる。お金になるからであろう。しかし断わる。出発したところに戻ってきた。その近くに人体の仕組みを示す展示会があるが、疲れもでてきたので入らず、直ぐ帰途につく。天津市内では交通巡査によって度々車が止められた。なぜなのか。北京ナンバーの車だかららしい。なぜ北京の車は止められるのか。

帰途も往路と同様見慣れた風景が展開する。悠久の時の流れをのみこみ、それを圧縮して、人間にみせてくれる、夕方のすばらしい景色である。天津を後にして車は一路北京に向かって走りつづける。途中小休止する。その横を馬の牽く車が通り過ぎていく。荷台の上に人がのっ

いる。一日の労働が終わり家路につく人達である。彼らは何処に出かけ、何処へ帰って行くのであろうか。広大な大地を夕日が赤々と照らしている。大自然が人も馬も全てを包み込んだような風景であった。昨日もかくあったように今日も過ぎていく。孔子は川のほとりに在って「逝く者は斯の如きか 昼夜をおかず」といったが、この大地と夕陽を見ているとそんな感情が湧いてくる。時空をこえた風景である。建物が次第に多くなり、高くなってきた。北京飯店に6時すぎに無事着く。

夜、共同通信社、北京支局長の伊藤氏に会い、イラク情勢、中国の対外事情、政治、経済、社会問題などを聞く。天津で車が停車させられたのはイラク選手の練習を北京でなく天津に移したことと関係があるらしい。胃腸の調子悪し。薬を飲み寝る。

## 9月3日 晴れ

昨夜は寝られなかった。体調のせいであろう。朝6時起床。窓外をみる。空は少し霞んでいる。領事館へビザの申請に行く。今回は案外簡単であった。国際関係の変化を反映しているのかもしれない。昼食を天壇の近くでとる。美味しいが胃腸の調子を考え減食。午後筆、カシミヤの服地などを友誼商店で買う。瑠璃廠に行き萃文閣で友人に頼まれた印鑑を注文する。

その後新しい百貨店がオープンしているというので見学に行く。アジア大会を目指したものであろう。行って見るとまだ開店していない。準備中らしい。しかし徐さんがかけあって、中に入ることができる。流石立派である。品物も豊富で展示の方法もすっきりしている。また店員の対応ぶりもよい。友誼商店で品物を買う時、伝票をいちいち別の処に持っていき、そこでお金を払い、伝票に判を押してもらってそれを品物を買った元の処に持ち帰り、それを店員に呈示して、やっと品物を手に入れることができるという七面倒なことをしていたが、ここではそんなことはしなくてもよい。商習慣の変更というのは文化の問題であり面白い。そこでお土産にネクタイを求める。外に出ると立派なビ

ルが立ち並び、中国ではなくよその国の街角にいるような錯覚をおこす。

夕食後、北京飯店の北側を歩く。新しい豪華なホテルが建っているというのでそれを見るためと、カラオケがあるというのでそれを確かめるためである。台湾飯店とか華僑大廈とか、天倫飯店など立派なホテルが建っている。あるホテルの一泊は3万円という。一般大衆はとても泊まれない。経済の論理とは別のものが働いているようである。カラオケなるものを体験しにあるホテルに入る。日本のカラオケにもほとんど行ったことがないので比較はできないが、北京のは広い部屋にテーブルが20台ほどあって照明は暗かった。曲名のファイルが回ってきた。歌は下手だし北京にきてまで恥はかきたくない。先生方が曲目の番号を紙に書かれるので仕方なく、一寸聞き覚えたことがある「北帰行」に印をつける。まず近藤先生に指名がくる。他の先生方でなく最も恐れていた指名がこちらにきた。困った事である。マイクの前にたつ。曲と歌が合わず恥をかくことと相成った。一番最初に歌ったプロ級の白い服の男性が声をかけてくる。そして手紙をかいとくれと先方のアドレスを書き、女性が日本語を学びたいといっているので紹介すると云う。すべては徐さんを通すようにいう。カラオケは日本が産んだものであろう。したがって他の製品と同じように全世界に広がっていくのは当然であろう。とくにカラオケは東洋民族独自の情緒を基盤にして広がっていくのであろう。

## 9月4日 晴れ

朝6時起床。7時半朝食をとる。ピョンヤンに行く日である。空港には3時前に着けば十分間に合う。4時半出発だからである。午前中道教の寺院、白雲観に行く。60星宿像が並んでいる。私はカノトヒツジ（辛未）の歳なのでその像を探す。左手を前に出して広げ、右手に杖のようなものを持っている像に初めて対面する。年代なり時間がこのように具体的な人物像として見られることは実に面白い。しかし何かおかしい。白雲観の白雲は何に由来するのであろう

か。唐詩選に「白雲一片去悠悠」（張若虛）や「白雲深處老僧多」（儉靈一）がある。「白雲生じる処人家あり」という詩があったが、これも関係があるのだろうか。以前（1985年）訪中した時、日中友好協会の宿舍のなかに確か「白雲亭」とかいう名の料亭風のものがあつた。その時もこの詩を思い浮かべていたが、作者が誰かは思い出せない。帰国してある人に尋ねたところ、杜牧の詩で「樊川文庫」にのっていると教えていただいた。

昼食を日壇公園の西南門にある石庭の美しいところをとる。前に来た時とちがって改造されている。主として竹と籐で作られた椅子や食卓のある部屋で食事をする。神仙神(?)と大きく書かれた見事な書がある。食後買物する。胃腸の調子はそのままである。3時前に空港につく。ベンチに座りただ漠然と、何気無く案内版をみている。隣の近藤先生に「ピョンヤン行きは3時15分になっていますね」という。「本当だ」という返事。よくみると4時台の便はない。おかしいと初めて気付く。スケジュールでは4時30分発J S 152便になっていたはずである。そして5時ピョンヤンに到着の予定である。だが目前にある案内版では違っている。急いで出國手続きに向うが時すでにおそしである。飛行機は定刻に飛んだと徐さんが説明。時刻変更を再確認しなかったのと、こちらがサマータイムであることを忘れていたのは大失敗であった。秘書長としての責任を痛感する。申し訳ない。しかし起きたことは仕方が無い。空港券は入手困難であり、汽車で行く外ないであろう。切符の手配を徐さんをお願いするが、本日はすでに業務は終わったという。明朝8時からとのこと。これもまた国が違えば仕方のないことと諦める。Auf Regen folgt Sonnenschein と言うではないか。英語で「雨降って地固まる」はなんといったかなあと、ぼんやりサムソナイトをみながら考える。

来た道に戻る。さすがにこたえた。言葉も少ない。車にゆられながら、今のこの時間は予期しない、また予定外の時間であり、偶然によってできた時間であると思う。人生にはこんな時間が多いのではなからうか。管理社会、計画社

会では人間はスケジュール通りに働かされ、動かされている。しかしいまの時間は失敗の結果得たものであれ、自由で、束縛されない、貴重な時間である。それは普通の時間、日常的な時間ではなく、異常な、非日常的な時間である。そう思うとこの時間は意義のあるものである。あるいはそのように自分に思わせようとしているのであろう。所謂 rationalization であり justification である。

北京飯店に再び投宿。フロアにいる従業員に「再見」というと笑っていた。同じ部屋621号室。明朝はこの部屋を出ることが出来るだろう。夜、外に出かけるのも億劫になり、飯店の2階にある日本料理の店で夕飯をとる。美味。酒もよし。5人で今日の出来事をはじめとして、いろいろなことをわいわい話しながら食事するのは實に楽しい。「旅は道づれ」のいいところは、道づれになった人の話が聞けることである。それぞれちがった経歴をもち、生き方、考え方、ものの見方をお持ちの人から様々なことをきく事が出来るのはうれしい。良い勉強になる。人間一生の間で耳学問によって多くの事を会得することが如何に多いかを考えてみる。人によって異なるかもしれないが、眼をとおしての勉強は大したものではないかもしれない。眼と耳、あるいは手や体による学習の寡多や違いなどを研究すると面白いであろう。色々な人の意見や考えに耳をかさない人は不幸である。損をしている。しかしこのような人も世の中に多い。そのような人は自分が損をしているとも思っていないであろう。ともあれ今回の旅の最大の成果は道づれの先生方から耳学問ができることにある。

夕食を終え、階下のロビーに降りる。そこで高屋先生の知り合いである村瀬さんという方にあう。日本国際貿易促進協会の京都総局の理事長で、現在日中の合併のことで大変困っているという話をされていた。中国側の取引上の身勝手な原因らしい、折角資金や技術、設備を援助しても水泡に帰し、設備を撤退するにも金がかかり、中国側にとられた形になってしまうケースが多いという。日本の中小企業は特に打撃が多いらしい。留学生の場合もそうで、日本の大

学で勉強できるように努力しても、日本に来てしまえばしら顔でお札にも来ないと愚痴をこぼされていた。国際化のなかでこれからの日中関係の在り方はこれらの、いわば経済的というよりも、経済外的なこれらの問題の解決から始めなければならないであろう。

## 9月5日 晴れ

度々眼が覚める。体調が思わしくないからであろう。6時半までベッドで横になっている。起床して窓外をみる。もうすでに街は活動が始めている。11億人の人間がいる国の首府の朝である。8時半に朝食、徐さん来られず切符の入手に手間どっていられるのではないかと心配する。やがて来られ入手できたと言われる。但し明日の分しかなかったらしい。だがビョンヤンへ行けるというメドが着いたわけで、徐さんにお礼をいう。今日と明日の午後4時半まで北京にいることになる。これを無駄に過ごさないように、さらに有意義に、かつ楽しくすごすためにどうするか。午後から蘆溝橋に行こうということに決定。昼食のとき昨夜の村瀬さんに会う。昼の食事は控えめにとる。

蘆溝橋はこれで二度目である。美しい橋である。欄干の動物達の像が「また来たな」といっているようで懐かしい。ここは明月を愛で賞する所。さしずめ観月橋といった処である。「蘆溝曉月」の拓本を求める。前回来た時には無かった飛行機が一機、河川敷においてある。それがこの景色にはふさわしくない。この飛行機が存在が1937年7月7日のあの事件を思い出させる。以前まだ建築中であった「中国人民抗日戦争記念館」を見学する。その前に抗日戦争のビデオをみる。

その後新しく出来ていた城壁に上がる。旧い家々が俯瞰できる。家々が一つの邑を形成していることがわかる。一辺が1～2Km位あるのか、そこが生活の営なまれている生活空間であり、村落である。見ていると、仕事から帰ってきたのであろう一人の男が門をくぐって家に入っていく。あの事件の時も、今日のような平凡な生活がここで行われていたのであろう。

戦争という異常事態が生活を台無しにするのである。

城壁からみているとかつて読んだ清水盛光氏の『支那社会の研究』という本を思い出した。そこには支那社会の特徴を、ギルド、国家、村落、家族の4点からみる視点がかいてあったように記憶するが、家と家との空間的関連性、村落の配置、接近性、気密性などの言及は無かったようである。今ここに立って脚下に展開する家や村落を見ていると、それを空間的に見ると共に歴史的、時間的にみることの必要性を実感した。城壁から降り車で飯店に戻って来た。体調は依然として治らない。困ったものである。

## 9月6日 晴れ

朝6時半チャイムで起床。ドアを開けるとちゃんと外出の身支度をされた高屋先生が立っておられる。時間を間違えられたようである。8時に朝食。1階の売店でパンとウイスキーを求める。夜行列車の旅のためである。一旦部屋に戻り、9時頃から故宮へいく。三度目であるが、この朱色の高い大きい壁や建造物の偉容、規模の広大さなどにただただ圧倒される。宝物は台北のほうに行っているが、この建物は持っていけない。明清時代の広大な敷地と、豪壮で壮大な建物を眺めていると500年という時間と空間を一緒に感じるような気になる。明清時代の経済力のみならず、政治権力の強さ、建築、造園、芸術などの文化面のレベルの高さを目のあたり見る事が出来る。紫禁城に相応しい威容である。

そういえばわが国の場合も中国に倣って宮中の中心的な建物は紫宸殿と紫の字がある。紫という色で階層をあらわし、その権威付けをしたのであろう。カラーによる支配の正当化については M. Weber もやっていないのではないか。

『絵画社会学』をいま試みているが、この点にもふれてみたいものである。日本の御所と故宮との共通性として、両者ともに平地に建てられているという点がある。しかし後者の壁は前者と比較することはできない。それは堅牢で強固な城壁である。威圧的であり、戦闘的、対抗

的、対立的である。またそれは守備的、防護的、内向的であるという両面性をもっているようである。それにたいしてわが国の場合は唯形式的に塀を廻らせたものにすぎないのではなからうか。それも江戸時代のようにたえず幕府の監視の下であった。実質的な権力、支配力、軍事力の有無がこの違いを生んだのである。しかしともに権力を握ったものが巨大な城壁を造ったのである。宮殿が双方とも平地にロケートしていることは共通しており面白い。それは単に地理的な理由や参内のための便利さといった単純な理由によるのかもしれない。

故宮ではなるべく今までに行ったことの無い所をみる。時計を展示してあるところに行く。また医学関係の書の展示もあった。しかしそれは現代のものであった。その書の一つに、「人在氣中、氣在人中」というのがあった。なにか解るようで意味深長な文句である。氣は呼吸だけではない。氣力や氣品のような氣質、精神あるいは勢いであり、パーソナリティでもある。このように考えるとこの文句が少し解るような氣もしてきたが、体のほうは元氣がまだ湧いて来ない。

故宮北側の内廷、所謂後三宮のある皇帝一族のプライベートな空間に入る。白松と麒麟の像がある。麒麟の麒は牡で、麟は牝であるということをも以前ここに来たとき知った。どちらが牡でどちらが牝なのか今よく見ようとおもった。判断は間違っているかもしれないが向かって右が牡であろう。『右手の優越』という本を思いだす。念のために写真をとっておこうと思ったがフィルムがない。小谷先生に撮ってもらうことにした。これから訪問するピョンヤンには一日に千里を走る馬、千里馬の大きい像がある。この馬は漢字では馬偏の麒麟と書く。だが千里馬はなにも北朝鮮の専売特許ではない。「千里の馬はあれど、一人の伯楽はなし」という言葉もある。千里とは非常に遠い距離を示す表現であることは当然としても、このように言いあらわす時代的、社会的背景を考えると面白い。交通手段が未発達の間では馬が最も早い乗り物であった。馬を乗り物として飼育し、上手に乗りこなす技術が高く評価されたのである。交通

手段の発達は近代になってから実にめざましい。いまやジェット旅客機は時速マッハ0.8ぐらいの速度で飛ぶ。マッハ1は空気中で約1225キロメートルであるから千里馬の比ではない。ラムジェットの速度限界はマッハ7ないし10といはれており、ロケットならもっと早い。麒麟も千里馬も麒麟もともに想像上の動物である、あの首の長い giraffe のきりんは日本語で麒麟と書いているようだが、中国ではどうなのだろう。こんなつまらん事を考えて故宮を後にした。

昼頃、北京飯店に帰り昼食。尾籠な話だが下痢が止まらず、薬を飲む。2時まで休息。それから北海公園を見る。あまり良い趣味とはいえない。蓮の池がある。気温も高く、多少バテ気味で、散策する気にもならない。3時半到北京駅に到着。前に来た時よりきれいである。アジア大会のせいかな。待合室の椅子に座り、これからの旅のことを考えると億劫になる。1987年にピョンヤンから北京に旅をした時のことを思い出すからかもしれない。だが今回の旅行は前回とは逆であり、また違った面白さもあるのではないかと思う。

4時8分定刻に発車。徐さん、董さんのお見送りに感謝する。四人のコンパートメントは4号室、樋口先生は3号室ということになり、相客があるまで近藤先生は3号室で就眠ということになる。日はまだまだ高い。4号室に道づれ5人が集合。話に花がさく。先生方の話は本当に有意義で楽しい。気が置けないとはこんなことを言うのであろう。列車は北京を発ち、天津に向かっている。乗客はそれほどでもない。北朝鮮に帰る人らしい人達が数人、ポーランド人2人、その他2、3人である。天津北駅18時21分着、31分発、食堂に行く。車窓からみる畑が赤く輝いている。大きい夕日が今まさに沈まんとしている。素晴らしい。感動的な瞬間である。あの大地震があった唐山には20時過ぎに到着。食堂の給仕らしい男女と筆談で意思疎通。どこへ、なにをしにいくのかと訊ねているので答える。こんな事でも気持ちしがほぐれ、相互に打ちとけるのが解る。隣のテーブルに座った親子とも仲よくなる。食堂車からコンパートメン

トに戻りまた話に花が咲く。

列車は秦皇島、山海関を通り錦西、錦州へと進んでいる。近藤先生は樋口先生の3号室で寝まれ、小谷先生はこの4号室の上段でやすまれる。小生なかなか寝付かれず葉をのむ。高屋先生ひとり晩くまで起きておられた様子である。

## 9月7日 晴れ

3時半、突然大勢の人の声がして起きる。沈阻（瀋陽）であるらしい。起きて通路をみる。そこは人また人である。多数の人が乗り込んできている。3号室の近藤先生は荷物をもってこちらに來られ、上段で寝られる。暫くのあいだ通路は大混乱である。後で判明したことであるが、3号室に乗った乗客はたった一人であった。あの大勢の人達はその一人を見送りに來たのである。なんと人騒がせなと怒りたくなる。未明の3時半と言う時間を考えよと文句の一つも言いたい。しかもこれは国際列車である。樋口先生によると、3号室に乗った男は、杏林の新聞記者で、妹のいる北朝鮮に3か月間行くという。呑気な話である。さらに驚いたことにはあれほど一杯にあふれるようにあった多数の荷物が朝にはほとんど無くなっていたことである。朝迄に止まる駅ごとに荷物を降ろしたのであろう。一種の運び屋かもしれない。それにしてもこの人のために多くの者が迷惑を受けたことは事実である。本溪、鳳凰城を経由して列車は丹東にやっと到着。7日朝8時である。昨夜と今日未明の騒ぎで睡眠不足気味。パスポートを係員がもって行ってなかなか返しにやっ来て来ない。やっと係員がきたとき発車時刻はすでに30分も過ぎていた。列車内のトイレは停車中で使えない。プラットホームに降りると空気が爽やかである。

朝食は昨日求めてきたパンで済ます。乗務員からお湯をもらい、ホテルにあったお茶のパックでお茶を作り飲む。列車は出発。すぐ鴨緑江にさしかかる。鉄橋の梁に弾痕が見える。国境の河。戦火の痕をとどめた橋である。新義州に着き、待合室に行く。前回此処を通った時は、北朝鮮からの出国でかなり緊張した。車窓から

みると向こうの貨車の辺りをシェパードを連れた兵隊を数人見たことなどを思い出す。今回はそんな緊張感はない。待合室の椅子に腰掛ける。横に三人の女の子が話している。一人の子はまだ幼い。二人はテーブルの上の箱をはさんで座っている。なんのために此処にいるのか。どうやら両替のためらしいことがなんとなく解かってきた。言葉も通じず、何らの表示もなされていないのである。小谷先生に会計をお願いしているので、そこで両替してもらう。

列車はほぼ定刻に出発。田圃はよく実った稲穂で満ちている。黄金色に輝く田園と、などかな丘と緑の山々を車窓にみる。長閑かな田舎の風景である。ここはほぼ自給自足の経済なのであろう。昼になり食堂に行くが団体客で満席である。1時に來いといっているようである。再び食堂車に行く。昨日の中国の食堂車より清潔である。ビールの缶が見えたので注文するが無いという。あの缶は空で飾りのために置いているらしい。隣の席の客は瓶のビールを飲んでいる。それと同じものを注文するがそれも無いらしい。高屋先生、体調悪く昼食をとられず、部屋で休憩。

3時半頃からピョンヤンに近づきつつあるという気配がする。荷物を上段から降ろし、降りる準備をする。ここは高句麗の都、朝鮮でも最も古い街である。街に近づくにつれ、大きな建築がみえてくる。前回行った時はなかった高い三角形をしたホテルの威容が眼に入ってくる。先程迄車窓から見えた長閑かで緑に囲まれた風景が一変して幾何学的で、人工的な景観となる。

3時55分到着のところ10分遅れてピョンヤン駅に着く。車さんらのお出迎え。3年ぶりである。再会を喜ぶ。社会科学者協会副委員長の金先生と白先生という方を紹介される。燕さんという通訳はこれから我々についてくださるとのことである。ベンツ4台で街を通る。懐かしい思いでの街角、建物、街路樹、川などを通りすぎる。今回の宿舎は以前のそれと違ってピョンヤンの西のほう、万景台の近くに位置しているようである。赤いネッカチーフをつけたピオニールの少女の団をみる。ロシア語辞典には



赤色少年と訳してあるがそれは英語のパイオニアからきており、もともと赤色とは関係がない。しかし共産党、社会党、ここの労働者党ではこの色が必要なのだろう。

宿舎に着く。いろいろな方の出迎えあり。宿舎は山を背後にして、なだらかな丘陵地に建てられている。301号室は高屋先生、302は樋口先生、303は近藤先生、305は小谷先生、306が私の部屋である。社会主義國でも4という数字は避けるらしい。実は宿泊者にたいする配慮からであろう。書齋を兼ねた応接室、ベッドルーム、バス、トイレ、その横に広い脱衣室のような部屋がついている。5時20分に高屋先生の部屋で車さんと私と3人でこれからのスケジュールの打ち合せをする。まず冒頭に3日遅れて着いたことを謝る。3時半からこの社会科学者協会の金副委員長主催の歓迎の宴会がはじまる。その席上、団長として高屋先生が挨拶される。すぐ東欧の民主化等具体的な話がでる。金副委員長はスペイン語が専門の方で、南米諸国へ行っていたという。専門は教育学である。高屋先生が東欧の変化の善悪はここで問わないとして、国際社会でいま変化が起こっていることに注目したいと話された。私はこの変化が特定の国民にとってプラスになるか否かを判断することの必要性、また一国民のみならず、関連する多くの国民にとってプラスになるか否か、さらにそれが全世界の人々にとってプラスになるかどうかを考えることが大切ではないかと述べた。料理は美味しい。熱く焼いた石で肉を焼く料理は特においしい。しかし長旅でさすがに疲れた。

## 9月8日 晴れのち雨

朝早く眼が覚める。5時半と思ったら4時半であった。暫く横になっていたが、寝られない。洗面をし、今までのメモを整理し、日記の記述を補ない持ってきた本を読む。この一週間読書らしいものをしていない。いま机で読書しているが、左の壁にカレンダー、右の壁に金日成主席の写真が掛かっている。カレンダーは先月のもので9月になおすために外す。よく見る

とハンゲルとドイツ語で説明がしてある。9月のは Der Berg Baerkdu, Samdzi aus gesehen と書いてある。他の月も Baerkdu 山の景色が多いようである。なぜドイツ語なのか。東独辺りからここへ来て宿泊する人があるからであろう。東西ドイツの統一後はそのような人も少なくなるかもしれない。

まだ体調は直っていない。今回は長い。今まで外国へ度々行ったがこんなことは初めてである。今朝早く起きたとき、みみづくか、カッコウのような鳴き声を聞いた。めずらしい鳴き声で、かつてラジオで野鳥の鳴き声の録音を放送していたとき聞いた声のようだった。窓を開けると空気がひんやりする。ここは今年雨が多かったらしい。朝夕は気温が下がるのであろう。

8時、朝食。ヨーグルト、ミルクなどがでる。北京の食事とは若干違う。朝はあまり摂らぬようにする。9時から市内へ。腹具合いが急におかしくなり、出発をすこし待ってもらう。凱旋門、チュチェ思想塔などを見学。樋口先生も腹具合いが悪くなられる。広場では少年・少女が集団演技の練習をしている。塔では以前会ったことのある、元日本国籍の婦人に出会う。高さんと言いつつ1931年生まれとのことである。この人のためにもわが国との国交が早く樹立することができればと願う。初めて塔の上迄登る。市内を一望することが出来る。玉流橋、人民大学習堂、体育館、今建設中の高いホテルなどが鳥瞰できる。遠くは少し霧があり見ることができない。塔の上は風が強い。

塔を降り、薬局に行く。高麗人参を求める。高価なものである。東國百貨店に寄りピョンヤンの地図を初めて入手。地図といっても簡単なもので、主要な建物、通り、区、などが書いてあるものであった。軍事上記載できないからだとして推測するが、簡単すぎて我々が地図と考えているものとの間の距離を感じさせる。かつてわが国にも軍港など軍事機密のため一部分明確でない地図があった。景勝地、たとえば天の橋立などの地図はこの種のものであって、あそこでは写真をとることも禁止されており、特定の許可をもった写真屋さんだけ撮ることができたの

である。織田という人の書いた『地図の歴史』という本を読んだことがあるが、古い時代の地図が近代地図へといかに発達してきたかという光の部分の説明に終始し、地図が如何に政治や権力によって塗り変えられ、創作され、捏造されたかという点の説明はなかったようで、なにか物足りなさを感じたことを憶えている。今日人工衛星が飛び交う時代になって地図の捏造は不可能になってしまったといえよう。

宿舎に帰り、2時半から協会の本部(?)の建物で白先生の發議で討論会がある。先生のテーマは「社会主義の運命」というもので関心がある。しかしすこし抽象的であった。東欧の民主化が現在進行中なのに具体的な問題提起を私は期待していた。しかし北朝鮮がいまおかれている状況ではそれを期待する事は酷といえるかもしれない。テーマがそう思わせるほどすばらしかったからであろう。私は次の点を指摘した。

1、この民主化が拡大するか、それとも縮小するのか 2、社会主義は資本主義と矛盾するのか、協調できるのか、また共存するのか 3、社会主義の変質とは何なのか、新しい社会主義、共産主義とは何なのか、これらの諸点をみるための規準や物差をつくる必要があるのではないか。

現実の生々しい政治的問題に社会学の理論はあまり役に立たない。このことを念頭におきながら問題の整理と整理法ぐらいの議論には多少嘴を入れることができるのではないだろうか。私の発言の後、白先生は社会学のアプローチについて質問された。それに少し答えて会議は5時半頃終わる。

白先生のご専門は社会思想であると昨日きいていた。だが今日の話では社会思想としての社会主義の行方に関してでなく、社会学とはなんぞや、という問題あるいは質問が多かった。このゆきちがいも前もって打ち合せする機会がなかったためであり、議論の焦点が曖昧だったことによる。しかし話のなかで社会学に関する質問が多かったのは、白先生個人の社会学への関心が高かったためであろう。またこの国でそのような研究がほとんどなかったので研究に興味をもつ人が現われたのかもしれない。昨日はじ

めて白先生と通訳を通して話したとき、開口一番故藤山先生と私が訳した『T. パーソンズとアメリカ社会学』を読まれたことをはなされ、藤山先生はお元気ですかときかれた。先生が亡くなられたことを話す。藤山先生がお元気なら御一緒に来られたであろうと思うと残念であった。白先生は子供のころ日本語を習ったことがあり、それからやっていなかったが、17年前読む練習を始めたといわれていた。それで訳書も読まれたわけである。だが短時間で社会学とはなにかを説明することはむずかしい。長い間、社会学の研究が無視され、さらに禁止されていた国であるから特にこのことは困難である。だが社会学的なものごとを見ようという気運が生じていることはよろこばしいことである。丸山先生と私との編著『社会学の視点』を寄贈する。

## 9月9日 晴れ時々曇り

今日は重陽の日。勿論陰暦であるから季節はずれている。菊の節句である。昨夜、白先生と車さん、燕さんの3人が高屋先生の部屋に来られ、遅くまで話す。白先生は主として社会学について私に質問された。社会学理論の概要を話す。近藤先生は北朝鮮の対外経済政策、国際金融について話され、小谷先生は経済学についてふれられる。11時過ぎまで話す。じつは経済学の洪先生が来られる予定であったが雨がひどくて来られなかった。先生とは京都で2回お会いしたことがあり残念である。

今朝は6時半起床。すこし頭痛、下痢はまだ止まらぬ。一昨日ベッドの縁で脛を強く打ち、それが痛む。化膿しないように持ってきた薬をぬるがあまり効果はない。今日はこの協会に来ている外国人との交流会をするという。私は今日、特に体の具合が悪いので残念ながら、交流会は欠席する。9時、先生方は出発、うとうとしかけたところに車さんが調子を聞きにこられる。またうつらうつらしかけると掃除の人が二人は入ってくる。それで戸外に出て建物の周囲を歩く。室内より外の方が涼しい。昨夜の雨で湿気があるようだ。

散歩から帰る。宿舍の管理人らしき人が一人  
でいる。手持ち無沙汰の様子。テレビを見  
ている。ソファにすわって暫く二人でテレビ  
をみる。今日は記念日らしく色々なアトラ  
クションがあるようでそれを放映している。  
管理人は人なつこい青年であるが、少し  
しか英語が解らず意思疎通が大変である。  
名前も漢字でうまく書けない。ハングル  
で書いてくれるがこちらは解らない。か  
れは4年間ロシア語を習ったという。名前  
をロシア語で書いてくれた、こちらも忘  
れかけた文字で書く。彼は少尉さんのこ  
とである。

部屋に帰り本をよむ。昼食をとる。給仕  
にきてくれた娘は「きこちゃん」にちょ  
っと似たところのある娘で、こちらも退  
屈なので話す。英語が通じるので少尉  
さんよりコミュニケーションができる。部  
屋にかえる。一人である。一人になる時  
はある。しかし今の一人になったという  
気持ちは普段のそれとはちょっと違う。  
どこが違うのかははっきりいえないが何  
となく異なるのである。それは第一に外  
国にいるからである。かも知れない。だ  
が外国にいた時も一人であった。1979  
年の留学の時もそうであったし、外国へ  
旅行したときもそうであった。だがそれ  
とは違うのである。言葉が通じない、解  
らないということがこの一人きりになっ  
たという気持ちを強めるのかもしれない。  
あるいはここは国交のない国であるとい  
う意識もそれと関係するのかもしれない。  
かといって私はそれをあまり意識して  
ないのも事実である。一人きりである  
というこの感じは、一人になれたとい  
うそれと、なったという感じに分けられ  
る。自然に偶然にそう成った状態と意  
識的、人為的にそうならしめた状態とい  
ってもよい。今の状態は前者にちかい。  
いままでの生活ではそういうことは少  
なかったのではないだろうか。今までは  
無理をしてその状態をつくっていたので  
ある。だから今の状態は珍しいし、貴  
重な体験といえるのである。

そしてなによりも今の状態が貴重な  
のは音が聞えてこないことである。物  
音ひとつつしない。日本にいれば、  
テレビ、ラジオ、電話の音がする。  
子供の声、もの売りの声、犬の遠吠え

が聞こえる。ここはそんな音とは関係  
がない。静寂、しじまとはこのことであ  
ろう。この状態をあらわす言葉は案外  
少ないのではないだろうか。しずけさ、  
しずかさ、しずごころなどを思い浮べ  
る。しずけさは詩や小説の世界ではう  
まく表現されているのであろう。こん  
なことに触れ出すとそれについて自分  
が知っている語彙がいかに少ないか、  
またこの分野にかんする無知をさらけ  
出すことになる。以前ある人がリタイ  
ヤしたら源氏物語を読みたい、芭蕉や  
蕪村を知りたいといっていたがその気  
持ちは解る。私はその時アーベル、ガ  
ウス、ガロア関数からはじめたいなど  
と云っていたが、実は漢詩や短歌など  
にも興味をもっているといいたかった  
のである。そんなに盛り沢山に希望を  
のべても結局時間の問題である。時間  
切れである。いまこんなに静かで自由  
な時間をもったことをあらためて実感  
するのもあと何十年も生きられない  
ということを自覚せざるをえない年令  
になったからであらう。子供の時は時  
間を気にしなかった。むしろ早く正月  
がくるのをまっていた。しかし大人に  
なってから時間におわれている。今年  
の年賀状に友人が2、3ヶ月前にそれ  
を出したような気になると書いていた。  
たしかにそのような気がする。

それにしても静かである。時々音が  
するのは冷蔵庫のサーモスイッチが働  
いて電流が切れたり入ったりする音だ  
けである。空白の時間、空虚な時間と  
でも言いたくなるような時間である。  
本をよんでいて、それも止めようと思  
った。こんな時間は減多に経験できな  
い。読書でそれをつぶすのも勿体ない。  
なにもせず、考えず時間をすごそう。  
むしろ時間に身をまかせよう。空白の  
時間を大切にしよう。しかしそうす  
ることは難しい。日頃の習性の然らし  
むところか。こんなことを思ったり、  
考えたりすること自体がおかしい。自  
然でない。無為自然といふようなこと  
を考えるようでは駄目である。困っ  
たことである。そんなことに関わりな  
く、時は流れやがて夕方になった。

先生方が帰って来られたのは6時を  
過ぎていた。樋口先生は体調をくずさ  
れ、困られた様子であった。7時に夕  
食。8時から金日成広場で

行われるダンス・パーティを見に行く。バン格拉デシュ、インドの人々が出発時間を過ぎてても集まらない。時間厳守とは関係のない国民性、生活、文化がよく現れている。マイクロバスはそれらの人を待っていたが、仕方なく出発する。パーティは盛大である。こんなに多くの人が広場に集まっている状態をいまだかつて見たことがない。またそれらの大群衆が踊っているのを見たのも初めての経験である。素晴らしい光景である。見方を変えればそれは異常であるといえるかもしれない。踊っているのではなく踊らされているとも見る事ができる。しかし野暮なことはいうまい。なにしろ現にこれだけ大勢の人々が集い、踊っているのである。そこに凄い熱気があり、エネルギーが渦巻いている。踊りはすぐ終わった。我々が会場につくのが遅れたためである。踊っていた群衆は三三五五家路についている。人が道にあふれ、バスは時間をおいて出発する。金さんという通訳の奥さんに出会う。彼女は英語の教師で通訳としてここにきているらしい。ということは英語圏の人々が北朝鮮に来ているということの意味する。たしかにこの国も大きく動きつつある。9時過ぎ帰る。小谷先生は早くやすまれる。

深夜持ってきた小さいラジオで福岡の電波が聞こえてくる。NHKの12時前のニュースらしい。雑音が入り聞きとれないところがあるが、概要次のごとし。

1. イラク問題の解決策を協議するため米ソ大統領がヘルシンキで会談、2. 双方の意見交換、3. ソ連軍勢力使用せず、国連決議を尊重、4. フセインと交渉する考えはなし。それはフセイン自身が決めることである。5. 難民、子供にミルクの供給を考慮中。6. 双方の密接な関係を再確認。イラク問題はまだまだ難問を抱えている。

## 9月10日 雨

6時起床。昨日一日休養したので久しぶりに元気になる。だが小谷先生の体調悪し。昨夜下痢止めの薬を差し上げたが、飲まれずに寝られたため、夜中に度々起きられたとのことであ

る。風邪気味のようにもあり風邪薬もわたす。樋口先生の体調もおもわしくないようで心配である。

9時半から本館で社会科学系の研究者と討論。主体思想のことにふれず、すぐ現在の東欧の民主化などの変化、国際化をどのように見るかという問題に入る。そちらの見解を聞くという形で会議が始まる。イラクのクエート侵入をどうみるか、緊張の受け取り方などについて、向かって一番右側にいた若い人が答える。なかなか的確な把握で面白い。マルクス主義、社会主義の将来性についてもかなり具体的な問題が聞けた。ただ北朝鮮の国際化にたいする具体的な政策などは聞けなかった。マルクス主義にたいする批判もでる。高屋、樋口、近藤、小谷諸先生から活発な意見がでて有意義であった。私は世界情勢の変化を捉える基準、それを測る尺度が必要ではないかという点に触れ、資本主義、社会主義の経済体制と絶対支配、民主支配という支配のタイプをクロスして、1 独占資本主義、2 福祉資本主義、3 独裁社会主義、4 社会民主主義の類型も考えられるのではないかと話した。今日は一日中雨である。

## 9月11日 雨

6時起床。金日成大学を訪問するため9時に宿舎を出る。副学長に会う。仏教大学との学術交流を積極的に考えるとのことである。大学構内を案内してほしかったという声もあったが、それもなく残念。ショッピングをして帰る。午後2時金徹明先生と会う。お元気な様子。お忙しいのにわざわざ時間をさいて来られたらしい。4時から黄根燁先生と会う。近藤先生と小谷先生の意見に同意を表明。私とは多少意見が異なる。夕食をともにする。いろいろな話ができる。樋口先生から在日朝鮮人の差別問題について話される。黄先生は自分の咽喉のいたみだとか、日本にたいする期待を話され、多少疲れられた様子であった。いまこの国は国際化の大きいというねりの真っ只中にいる。今までの国際関係は一変しようとしている。したがって今は慎重でありつつ、早急な政策決定をしなければなら

ない時であろう。このような大事なときにわざわざ我々に会いに来てくださって感謝にたえない。

高屋先生の部屋で2人の来客とはなす。9時すぎ朴先生が来られる。先日雨で来れなかったことを詫言られる。会えて本当に嬉しい。早速北朝鮮の経済事情について話される。素直に、明確に、具体的に話される。明日は金剛山に行くので先生ともっと話し合いたいがそれができない。分かれるときなにか淋しさを感じる。朴先生とは今度で三回お会いしたわけであるが、なんとなく親しみを感じるのである。それは何なのか。伏見にある法務局の出張所で金微明先生と朴先生らと一緒に許可がおりるのをじっと待っていたという共同体験も一つの原因だろう。人間と人間との親しさを取り扱う学問として社会学があるが、その研究はこの問題について深くふれていない。そこに今までの社会学の大きい欠点があるのではなからうか。人間が生きていくために絶対的に必要なことは他者であり、しかも自己を理解してくれる人の存在である。人間の価値は信頼出来る友人を何人もっているか、さらにその信頼がどれほど深く、かつ強いかにによって決まるといえよう。こんなことを考えていたらなかなか寝つかれない。

## 9月12日 晴れ

9時、宿舎を出発、ウオンサン（元山）經由金剛山に向かう。ピョンヤンの街を通り、大同江に沿って走る。橋を渡ったところで広い道路を建設している。大勢の人が作業している。砂ほこりがすごい。街を出るとすぐ田畑がひろがる。ポプラ並木が美しい。人影は少ない。昨日と一転して今日は良い天気である。太陽はたかく、汗ばむほどである。日の光りに自然が輝く。空は青い。山はなだらかである。田畑の実りは多いようだ。豊かで長閑かな村がところどころに点在している。この国は農業の国であるが平地が少なく、自給率は75%と聞いた。

出発のとき通訳の漢女史に近藤先生と私の車に乗ってもらうことになり車中色々なことが聞けて大いに助かる。彼女は京都に来られた時

会った人である。近藤先生から陸軍士官学校時代のこと、戦時中、戦後の生活、新聞社のことなど色々な話をうかがい楽しい。ウオンサンへの途中、新坪という処で小休止。川の流れが美しく、崖が切り立っている景色の素晴らしい処である。休憩所に可愛い娘もおり花を添える。暫らく休んだのち一路ウオンサンへ。車の中では話が弾み、窓外には美しく豊かな大地が輝いている。

正午前元山に着く。海がみえる。きれいな街である。港には北朝鮮の国旗のマークをつけた白く大きい船が停泊している。ひょっとして舞鶴港にきた時テレビの画面でみたことがあるあの船であるかもしれない。ホテルに入り、隣の建物で昼食をとる。食堂がホテル内に無いのかもしれない。もしそうだとすれば雨の時など困るであろう。ずっと前ケルンでそんな安ホテルに泊まったことがあった。だがここはそんな安ホテルではないはずだ。ロビーの椅子に腰掛けしていると、白先生が社会学のことを聞きにこられる。漢さんの通訳で生活に密着した現象をどのように社会学的にみるができるかを話す。漢さんも面白がってこの続きをまた聞きたいと言われる。困ったことになった。ホテルではロシア人の観光客が多いようだ。子供づれの団体らしい。

車はガソリンを入れに行ったらしい。なかなか戻ってこない。そういえば道中ガソリン・スタンドを見たことがない。この国の石油使用量は僅かなのであろう。1時半すぎホテルを出発。運転手とは最初言葉が通じあえないので、疎遠がちであったが、毎日顔をあわせていると次第にうちとけてくる。宿舎にあったお菓子を持ってきたので食べてもらう。車は南の方向に走り続ける。道路はピョンヤンからウオンサンまでのそれより悪いようである。しかし風景が変わり旅は快適である。左手に海が見えてくる。日本海である。この国では東海という。小さい漁村がいくつか点在している。38度線の方に南下しているので、兵隊の姿が眼につく。しかし厳しく、ものものしい様子ではない。所々検問をするような場所がある。また海岸線には電線が張ってある。海岸からの侵入を防ぐため

のものらしい。

ウオンサンから金剛山まで約3時間かかるという。途中海辺の休憩所で小休止。海で泳いでいる人もいる。一人のロシア人らしい女性が水泳中アクシデントでもあったのか2人に抱えられてあがってきた。歩けるぐらいだから大したことはないであろう。少し休んで出発、通訳の漢さんがあの山が金剛山ですよという。それまでの疲れがでて寝ていたのであろう。一変にまどろみからさめる。左手の遠くに雲をいただく山脈がみえる。暫らく行くと今度は右手に大きい山容が見える。金剛山である。この山を初めて知ったのは小学生のときであった。低学年であった。あるいは未だ学校にいない時分だったかも知れない。正月のお年玉、といっても当時はそんな洒落たものでなく、絵本を買うことがゆるされたので、多分母の判断でこの本ならよいというので1円ほどで絵本を買ってきた。それは名所、景勝地を描いたものであった。松島や天の橋立、安芸の宮島の日本三景をはじめ各地の景勝地が載っていた。その絵本の最後の方に金剛山があったのである。こんな山が朝鮮にあるということを初めてその時知ったのである。その山を今見ているのだ。国交の無い北朝鮮にきてこの眼で確かめることが出来たという喜びが湧いてきた。接近するにつれ、山の姿は種種に変化してくる。雲の動き、光の当り具合によってそれは千変万化する。

5時5分無事ホテルに着く。ホテルの名はOnjong-ri Hotel というが、漢字でどのように書くのかわからない。ホテルの部屋はフロアにござが敷いてあり、かつて韓国の光州へ行ったとき泊まった旅館のそれに似ている。恐らく冬期はオンドルになるのであろう。ベッドは木製で私のは中央部がへこんでいる。小谷先生と同室。北京以来である。この部屋のキーがなかなかいうことをきかない。隣の樋口先生、近藤先生の部屋の鍵もそうらしい。

窓を開けるとひんやりする。夕陽に山肌が赤く輝いている。峰峰が各々その威容を発揮しているようであり、またそれらが一つの山塊となってさらに威厳ある全容を現わしているようでもある。山頂の鋭い稜線、山腹のスロープ、

山麓の狭い傾斜地、そしてあちこちにある林がこの山を形づくっている。夕日が傾くにつれて、今先がた見た景観は変化し、光の部分が影になっていく。

ホテルの近くに温泉があるというので出かける。その途中、ホテルのすぐ近くに月の輪熊が檻にいる。温泉は混んでいて一時間ほど待たないと入れない。人気があるのはこの国では温泉が他に余り無いからかもしれない。近藤先生と一緒に入る。ぬるま湯である。小谷先生は風邪気味なので止められる。ホテルに帰り、夕食を2階の食堂でとる。一般の食堂とは違った場所である。ロシア人が多い。ソ連から近いので当然であろう。中国人もみかける。やはりここ金剛山は有名な景勝地なのである。8時間に及ぶ旅でさすがに疲れた。

## 9月13日 晴れ

朝6時起床。ベッドの中央部がへこんでいるので夜寝付かれなかった。7時、2階の食堂で朝食。のち運動靴に履きかえる。ホテルにちゃんとそのサイズのものが用意してある。寝不足のせいかもしれないが心臓が気になる。この旅行中は幸いにして気にすることはなかったが今朝は違う。薬を服用。ホテルで金剛山の本と絵はぎを買う。9時出発。車は道の両側に茂る緑の木々のアーチをくぐるようにゆっくり走る。山道を登っていく。右手に沢がみえてくる。樹木が密になったところで車を降りる。日本語の少し出来る案内役の老人がこれからの説明をしてくれる。年はとっているようだが元気そうな人である。久しぶりの山登りである。朝のこともあり一寸心配である。

空は雲一片も見られぬ快晴である。林の向こうに水が見える。それは徐々に溪流となる。岩にあたり、渦巻き、淀みあるいは急流となって流れ去る。高い岩から流れ落ちる滝もあり、穏やかに微唾むように止まる流れもある。案内人は峰の稜線が描き出す姿を兎や亀などに似ていると説明する。なるほどそう言われればそれに似ている。溪谷と木々の緑が調和して素晴らしい。水清し、緑濃し、山高し、つずらおりの道

をいく。しかし私にとってこの道は苦しい。漱石ではないが「山道を登りながらこう考えた。智に働けば角が立つ、情に竿させば流される」といった余裕はない。汗びっしょりである。心臓が耐えられない。一人木陰にしゃがむ。葉をのむ。これ以上発作が起らないことを祈るのみ。元気な中年の女性の一団が歌を合唱しつつ通り過ぎていく。

しばらく休んで独りでゆっくり登っていく。心配されたのか先に行った二人が探しにこられ実状をはなす。それでもここまで来たのだからと思って登る。やっと大きい滝が見える。高さが17mという。Kuryong という名の滝という。ここまで辿りついたという感じだけで帰り道のことはよく覚えていない。下りて来て車に乗って初めて下山したという実感をもった。Sanil湖に行く。美しい静かな湖である。そこにあるレストランで食事をする。ホテルに帰る。なにかしら疲れている。ホテルのエレベータが途中でストップ。初めての経験である。階と階の間で停止。余程電力事情が悪いのであろう。エレベータ内の電話で朝鮮の人が連絡し、やがて内からドアを開けて外に出ることができた。夜12階にあるバーでビールを飲む。漢女史が歌う。早く部屋に帰り風呂をあびて就眠。

## 9月14日 晴れ

朝6時半起床。ベッドの加減が悪いのでフロアに布団を敷いてみたり、そうすると硬いのでまたベッドに戻ってみたり試行錯誤をやっていたので寝不足気味である。8時に朝食、9時ホテルを出発、帰路につく。来たときは夕方の金剛山の威容と美しさを見ることができたが、今は朝の光に映える山なみの姿を望むことができる。徐々に遠くなる金剛山を振り返り、再びここを訪れることがあろうかと思うと名残惜しい気になる。車は来たときに小休止した海岸の近くにある建物に停車。だが今日は休みという。

帰路は通訳の漢女史は樋口先生、小谷先生の車に乗られる。車の1台が30分程どこに行ったのか帰ってこない。昼前、ウオンサンに到着。例の食堂で昼食をとる。ピョンヤンの宿舎での

味より多少辛いような気もする。宿舎では外国人向けのため味付けの加減をされているのであろう。

東海をあとにしてピョンヤンに向かう。来た道戻るなので景色は同じであるが、方向が逆なのでまた違った趣がある。新坪という休憩所で一服する。来る時出会った娘さんたちがいる。そこの管理者も出て来て一緒に写真を撮る。再び車に乗り帰路を急ぐ。途中脚が非常にだるくなる。昨日の山登りのせいかもしれない。また長時間車に乗りつづけているためかもしれない。近藤先生と話ながら帰る。道の両側の田畑はまさに実りの秋である。牛が草を食んでいる。一人の農民は畑で黙々と働き、二三人は道端に腰を下ろして話し合っている。学童たちの一群が手を振ってくれる。

ピョンヤン市内に入る前、車が止められる。検問らしい。なにかあったのかと緊張する。しかしこともなく市内に入る。商店にたちよる。急に空があやしくなり夕立になる。金剛山行きは幸いにも快晴に恵まれことに感謝する。5時半に無事宿舎に着く。部屋に戻るとなにか急に疲れをおぼえる。しかし先日車さんに頼んでいたテニスのラケットとボールが届いているというので近藤先生、小谷先生と一緒にコートにでる。ボールとコートが黒い、そのうえ夕方でははっきりせず10分程で止める。後副所長さんが部屋にこられ各自にお土産をいただく。夕食のとき金剛山への旅の話がでる。夜金という元国連へ行っていた人、この人とは京都でも会ったことがあるが、その人と姜吉秀という人に会う。少し話されるが、我々の旅の疲れを察して早く帰られる。

## 9月15日 晴れ

朝5時起床。ピョンヤンを発つ日である。3日ここへ来るのが遅れたためあつというまに日が過ぎたようである。窓を開ける。空気がひんやり感じられる。中秋の気配である。6時40分、荷物を階下に降ろす。50分から朝食。7時半に宿舎を出発。昨夜出会った二人や会議で話した先生方のお見送りに感謝する。出会いは必

ず別れを伴う。7日にここに来ていろいろな人と再会し、多くの方々と知り合った。この宿舎では6晩過ごしたことになる。短い滞在であったが快適なところであった。宿舎を後にする。何度も通った並木道を車は通り過ぎる。市内に入ると朝の通勤の人々が多くなる。いずれも同じ風景である。だが日本のような通勤ラッシュはみられない。

8時10分空港に到着。この空港も懐かしい。車さんが出国の手続きを済ませられる。控え室に入り出発まで白先生と話す。白先生とは今回初めてお会いしたのであるが、着いた時から今日迄ずっと付き合っていた。また私にとってこの国で初めて社会学の研究者に出会ったことになり感慨深いものがある。副所長の金先生には初めから終わりまでお世話になった。車、漢、燕さんらの助力に感謝する。皆さんにお礼を云い、再会を願ってバスに乗って、飛行機までいく。座席11A。座席の後半はアジア大会に行く選手で一杯である。ボートの選手らしい。やがて離陸し眼下に色づいた実りの秋が展開する。快適な空の旅がつづく。

無事北京空港着。下りる時選手団が先である。一人の外国人が文句を言っていた。社会主義国では国家の威信をかけた選手の方が優先するのであろう。一体国家の威信とはなにか。面子とはなにか。社会学的にみると実に面白いと思う。威信とは威光と信望をちじめた言葉といわれるが、威光が一般的にそれをもっている側の、信望がそれを認める側の働きをさしているのではないかと考えられる。そうであるなら威信というものは両方の働きがあり、それがうまく結合したところにみられるものといえるのではないだろうか。それは M. Weber のいう支配が成立するのは支配される側にそれを正当とする信念がある場合であるというのと同じであろう。しかし面子と威信とは同じであろうか。言葉は明らかに違うが、用いる時案外同じ意味で使う場合があるのではなからうか。つまり外面的、対外的な面に重点をおく時がそれではないだろうか。帰ったら Weber の『儒教と道教』で調べてみたい。

北京空港には徐明さんと董さんが迎えに見え

ている。感謝の一言につきる。空港の二階にある食堂で昼食をとって北京飯店に向かう。アジア大会の前というのによく北京飯店がとれたものである。それというのもホテルの乱立で客が集まらないからであろう。北京のホテルのベッド数は5万、東京のそれは2万4千という。だから我々はここに泊まれるのである。有り難い事である。今回は9階の部屋で窓の左手に故宮を俯瞰することができる。荷物を解きほつとする。小谷先生と同室。まだ体調は良くない。

夕食は餃子を食べようと話がまとまり出かける。車で少し行くと、街のたたずまいが何かしら、かつて来たことがある処に似ているような気がして来た。やっぱりそうであった。車が停ったのは以前宿泊した東方飯店であった。万明路11号にある。懐かしい。あのとき飯店の前の古い家屋がとり壊されていたようにおもったが、あまり変わっていないようである。変わったのは飯店自体である。客の姿がない。フロントも手持ち無沙汰の様子である。新しいホテルでさえ客待という状態では、ここのような、いわば場末のところでは客が遠のくのは当然といえよう。

12階の料理店で食事をとる。此処もお客は我々だけである。食事がはじまる。肉や野菜、魚の料理は次々と出るが、お目当ての餃子は出て来ない。餃子を食べようと思って来たのにそれ以外の料理で腹は一杯になる。少なめに採っているのだが油っこいものが満腹感をおぼえさす。そして待って待って最後に期待の餃子が出て来た。二三種類あるいはそれ以上の餃子がでてきた。そのときはもう腹一杯なので食べられず、すこしつまんでも味が判らない。残念という外ない。しかし勿体無いことではある。

食事のあと下をみると道に面した古い民家に明りがみえる。そういえばこの旅行中、家の明りを意識したことはなかった。なぜなのか分からないが、夜民家を見る機会が少なかったことが大きい原因だろう。アパートの明りは確かにあった。しかし民家のそれは見る事がなかった。この階下の民家はよく見ると道に面した部分が店になっている。しかも奥行きがきわめて短い。まるで店頭で商いをしているかにみえ



る。店というイメージも所が違えば異なる。

夕食後、雑技団を見にいく。それは養成している学校に属しているのか、あるいは劇場が主で、学校が従なのか解らない。ピョンヤンで見たサーカスとはまた違った面白さがある。ただ観客がほとんどいない。テレビの方に関心が移っていくのは一般的な傾向といえよう。あるいは夜は政情を反映して市民が外出を控えているためであろうか。見に来ていた少ない人達のなかに、夫婦らしい二人がそれぞれ自転車で帰っていくのを見た。

北京飯店に戻ってきて下の売店でショッピングをする。高屋先生は少し疲れ気味らしい。風呂に入り疲れをとる。小谷先生は毎晩全体の会計簿をつけられて寝すまれる。ピョンヤンでは部屋が別々だったのでその姿を見ることがなかったが、いまそれを見てご苦労を思い、感謝する。

## 9月16日 曇のち雨

今朝は以前朝食をとった場所でなく、1階の食堂でとる。そういえば昨夜泊まった部屋も前のそれと比べると少し高級な感じがしていた。食堂の利用状況は相変わらずで客の数は少ない。これでは採算が合わないであろう。午前中、大鐘寺古鐘博物館に行く。大小様々な鐘が展示してある。一番奥の建物に一番大きい鐘がある。鐘は何の為に作られ、撞かれるのか。鐘の音は庶民の生活にとってどのような意味をもっているのか。西洋の教会の鐘と中国のそれとの共通性と相違性の研究は社会的に面白いであろう。北京大学に行くが構内に入ったところで断られる。前回、北京大学を訪問したときの社会学の先生方はどうしておられるのか、その消息を知りたいものである。

昼食後、頤和園へ行く。前回は石船の所から入ったが、今日はその逆の、東側の東宮門から入る。日曜日のせいか人が多い。しかし前に来たときの方が多かったようである。昆明湖の佇いも変わらず、仏香閣の優雅な姿も同じである。以前来たときここで宮廷料理を食べたことを思うと懐かしい。今日は蘇州を再現した新し

い公園をみる。そこはまだ建設中である。運河を作り、その廻りに色々な店をつくっているが、それらの店も一部しか開いていない。

外に出て、近くで昼食をとる。それから円明園に行く。はじめは裏門に行き、あらためて表のほうに行く。切符を買いに入ろうとすると、雨が降りだし、ほんの一部を見ただけで見学できなかった。石造りの西洋式庭園がみえただけであった。ここは義和団の乱で破壊されたのだと思っていた。しかし気になるので帰国して調べてみたら、思い違いであった。1860年英仏軍の掠奪、放火にあって廃墟になったのである。頤和園もそのとき同じ運命を辿ったのであるが、西太后によって頤和園は再建された。だが円明園はついに再建されず廃墟を今にとどめている。哀感胸を打つ。

1860年というと、あのアロー号事件に端を発する北京条約が結ばれた年である。天津条約は1858年であるからそれより2年後ということになる。西欧の列強は中国を食い物にし、無理難題をおしつけていた時代であった。その後に日本も同じことをしたのである。私は今日いう世界史を学ぶ機会がなかった。戦時中に旧制中学に学び、勤労動員で教科を教えてもらうことが少なかったからである。しかしそれは言い訳にはならないと考え、歴史を知るように努めてきた。だがいかにせん時間が無い。これからはもっと積極的に歴史書をひもとかねばと思う。

ところで円明園を造園したのは誰か。西洋風の庭園であるからそれは当然西洋人であろうと思って調べてみたら、それがカステイリオーネ（Castiglione 1688-1766）であった。彼は1715年に北京に来て雍正、乾隆帝に仕えたという。西洋画を紹介したのも彼である。清朝につかえた宣教師では彼のほかに暦の改定に貢献したアダム・シャルルやフェルベースト、測量技術および地図の作成に関わったブーヴェンなどがある。かれらの貢献を思うにつけ東西の文化交流の意義を今一度考えねばならないと思う。そんなことを考えると円明園に行っていて内部を見学できなかったのは非常に残念であった。別の本によれば、円明園は今は廃墟であるが自然の景観に勝れ、四季それぞれに趣のある姿を現

わすという。しかも桃や杏の花が咲く頃には甘い香りが附近に漂うという。杏はないがまさに桃源境というよう。桃李言わざれども下自らみちをなすと言うではないか、少しの雨ぐらいでなぜ園に入らなかったのか。残念である。悔やまれる。

夜、徐明さん董さんへのお礼の会をする。北京ダックを食べる。美味。お二人には本当にお世話になった。徐さんは70才という。若くみえる。心臓病の薬を頂く。ご配慮に感謝する。夕食後観劇。孫悟空の喜劇。入場者は少ない。外国人の団体が開幕寸前に入ってくる。休憩のとき後の座席にいる人々に、小谷先生がドイツ語で何処からきたのかときかれる。ハンブルグ、ボンとのことである。それがきっかけになってストーリーが分かるかなど色々聞いて来る。ホテルに帰り荷物の整理をする。サムソナイトの中はいつのまにか一杯になっている。旅することはものを買うことでもある。

## 9月17日 晴れ

5時半起床。帰国の日がきた。シャワーをして、今一度荷物を点検する。いま机で昨日の分の日記をつけている。8時半朝食。食堂内に客は僅か。今日は前のような失敗をせぬよう慎重でありたい。前車の轍を踏むとは他人のした失敗と同じ失敗をしないということで、自分が過去にした失敗を繰り返さないという場合は使わないのではないだろうか。この場合はどういう表現が適切なのか。ミスを重ねる勿れであろう。

午前中時間があるので、噂に聞いていた、北辰集団を見学に行く、安定門外北四環中路に位置する。ビルが立ち並ぶ。センター群が偉容を誇っている。新しく建てられたホテルに入る。さすがに豪華である。ロビーを横切り、喫茶店でコーヒーを飲む。私は胃腸を心配して飲まず、咽喉が渴いていたのでビールを注文する。先生方はケーキも注文される。一つ9元とのことである。庶民の口には入らない価格である。周囲のテーブルには人影がない。昼になれば多少客が多くなるのであろうか。高屋先生がケー

キが余ったらどうするだろうといわれる。フロアーも天井も柱もピカピカである。大理石がふんだんに使われている。だがお客の姿はない。

午後3時、北京発JAL786便に乗るため空港には早めに着く。空港の2階、以前来た食堂で昼食をとる。徐、董さんらと一緒にする。2時過ぎにお二人と別れる。多謝の一言。本当にお世話になった。再見の機会が早いことを願って握手する。出国手続きを済ませるまで見送ってくださる。免税店で土産を買う。定刻に離陸。台風の接近を心配していたが影響は無いらしい。

機内で今回の旅行の印象をメモする。

1. 4人の先生方と同行することができたことは実に有意義であった。その理由として、第一に先生方から色々なお話を聞いたこと、いわゆる耳学問ができたこと、第二に17日間生活をともししてそれぞれの生き方、考え方、感じ方を学ぶことができたこと、そして第三として共にいろいろなことを経験したことである。つまり大学でお会いして話すということだけでは経験し得ない多くのものを学ぶことができたことである。

2. 旅行中ハプニングもあったがそれを苦にせず、楽しみにかえ、意気相い投じて、つつがなく無事帰る事ができそうであること。これひとえに先生方の協力のお陰である。勿論、北京の仏教協会、ピョンヤンの社会学者協会その他の多くの人々のご好意はいうまでもない。

3. 今回中国と北朝鮮を訪問することができたのは非常に時期を得たものということができないのではないと思う。特に北朝鮮の場合、日本との国交を考えると、現時点は両国にとって将に機が熟しているといっても過言ではなかろう。その理由をうまく、適切に言うことは難しいが、両国で受けた印象だけを書いておきたい。

北京について、表面的な印象にとどまるが、人民の生活はそれなりに平静である。のびのびとしているようであった。これが平常の姿であらうか。一方では政治活動の禁止、言論の統制、思想の弾圧などが厳存しており、そのなかで、いわば異常の中の平常の生活であるといえ

る。長い過去の生活がこのような生き方を教えたのであろう。経済的に国家は破綻に傾いているが、国民はどっこい、したたかに生きている。そこに人民の力強さ、エネルギーをみる。どのような逆況にもめげず、耐える力が感じられる。それと比べれば今日の日本人の方が危ないのではないか。経済成長を支え、それを拡大した力は高く評価されるが、逆況になった時、中国人のように耐えられるのか疑問である。

今一つ思ったことは今日の国際化の波の中で、依然として中国は社会主義路線を頑なに守ろうとしている。思想や制度、政策の固定化、膠着化が経済の非活発化、国民の政治不信、国際社会での孤立化を生む大きな要因として今後ますます顕著になってくるのではないか。それは全世界にとって大きい影響をもたらすとともに、11億ともいわれる膨大な人口の死活問題として重要な問題となるであろう。隣国の人間としてこのことに大いなる関心を抱くのである。

国際社会の関係の把握と分析は緊急かつ不可欠である。だが政治学をはじめ社会科学はこれにたいしてあまり貢献していないのではなからうか。社会学においてはもっとひどいといえよう。国際化の社会学のイロハの問題すら議論にのぼってこない。慚愧にたえない。私が朝倉書店で出版した国際化の社会学の問題にかんしてもう一度考えて見る事が必要がある。このことを思ったのも今回の旅行のおかげといえよう。

北朝鮮について、この国も独自の路線を走ってきた。社会主義、共産主義路線プラス、チュチェ思想である。しかし今それが国際化の波に洗われ、揺れ動いている。揺れまいとする力と波の力とのあいだで摩擦がおきている。友好国であったソ連と中国は自国の経済的、政治的、社会的な大きな内政問題と外交問題をかかえ、北朝鮮のことに構ってられない状態におちいつている。しかも両国は韓国と仲よくしようとしている。

このような国際状況、さらに東欧諸国の民主化の動きは、今までの北朝鮮の外交のありかた、政策自体を自ら再検討する状態を作ったといえる。きわめて重要な時期、国の命運を賭ける意思決定が迫っているときに北朝鮮を訪問す

ることができたのは実に良かったし、勉強になったと思う。この国は長い間いわゆる西側と接触を持たず、あるいは持ち得ない状態であった。あえていえば鎖国状態といえるかもしれない。それがオーストリア、オートノミーの経済と、政治的、社会的な独自性、主体性、固有性を培ってきた。そのことはそれなりの価値をもつ。しかしそれは社会主義國との関係上での価値である。今社会主義國自体が非社会主義化しようとしている時、いわば座標軸が動き、新しい軸が現れようとしている時、どのように既存の価値を変えようとするのか。この問題の中心はそれらの変化をどのように把握し、理解しているかということと関係する。外から座標軸の変化と移動をいくら指摘してもあまり役立たないかもしれない。要は自分がそれを認識することである。この場合ものの見方が硬直化しないこと、多様なものの捉え方を容認する態度、政治のレベルでいえばその柔軟性、フレキシビリティをもった政策が必要になろう。そしてこれらの態度や政策は今迄のそれらと対立し、競合することを許容することがないと育たない。また非常に重要な事は自国内の現象だけでなく、いま起こっている、あるいは起こった事柄、さらにこれから起こるであろう事柄についてどの程度正確な情報をもっており、それにもとずいて意思決定する能力があるかである。

24日に金丸氏が訪朝することを二三の人に聞いたがそのニュースを彼らは知っていなかった。情報はごく一部の支配層にしかいきわたっていないようである。もしそうであるなら、今日の東欧の民主化、イラク問題、世界の動き等のさまざまな変化とそれを伝える情報化の問題は密接不可分である。この国の情報化こそ重要な課題であるような気がしてならない。とくに今迄西側の情報が入りにくかったこと、チュチェ思想中心主義はこの問題解決を困難にする要因となるのではなからうか。しかし勤勉で賢明な国民性は必ずやこの難関を突破するはずである。

窓外は雲である。アナウンスによれば大阪空港は雨とのこと、台風によるものであろう。19時15分定刻に無事着く。仁科さんのお出迎えを

うける。大学当局の配慮を心から感謝する。  
「道づれ雑記」を終えるに当たって、私個人の  
独断と偏見で見て、感じ、理解あるいは誤解を  
した部分がかなりある。先生方のお名前を拝借

したが全ての責任は私にあることを明記してお  
きたい。(これは1990年9月1日から17日間の  
メモ、日記をもとに、1991年1月20日～30日に  
加筆したものである)